

シンガポール日本人学校チャンギ校における国際理解教育

前シンガポール日本人学校小学部チャンギ校 教諭

富山県砺波市立砺波北部小学校 教諭 宮 嶋 克 英

キーワード：異文化理解、英語教育、体験活動

1. はじめに

シンガポールは、多民族国家であり、中華系、マレー系、インド系が全体の9割を占める。それに伴い、英語、中国語、マレー語、タミール語の4か国語が公用語となっている。宗教においても、イスラム教が大半を占めるが、仏教、ヒンズー教、キリスト教など様々である。

シンガポールで生活する日本人にとって、この「多文化・多民族の融合した国－シンガポール」であることを十分に理解し受け入れていくことが必要である。当該文化特有の食や、しぐさ、人柄など、予め理解しておくことで、様々なトラブルや意見のくい違い、時には相手を傷つけることを避けることができる。チャンギ校に通う子どもたちは、異文化を理解し行動できることを目指し、様々な教育活動に取り組んでいる。

2. 英会話を起点に、異文化を学ぶ

シンガポール日本人学校チャンギ校では、週3時間の英会話（平成30年度からは「英語科I」として教科化している）の授業がある。「話す・聞く・読む・書く」の4技能を評価し、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: CEFR）レベルに応じて12のクラスに分かれた少人数による指導を行っている。幼少のときからシンガポールに住むネイティブスピーカーの子どもから、シンガポールに来て間もない英語初心者の子どものまで、きめ細かに対応できるようになっている。

英会話の授業は、その名の通り英語の学習を行うものであるが、異文化理解と英語力の向上を目指した特色ある指導計画を立てている。その中の一つに、国民の祝日にちなんだイベントを行っている。イスラム教の「Hari Raya Puasa」、ヒンズー教の「Deepavali」、中国の旧正月を祝う「Chinese New Year」では、それぞれの文化のもつ伝統儀式や装飾、遊び等、英語を通して異文化に触れている。

(1) 英会話を起点とした異文化体験

① Deepavali

「Deepavali」とは、別名「光の祭典」とも呼ばれ、悪に勝った善を祝うヒンズー教の祭りである。諸説様々であるが、勝利を祝う人々が火を灯して出迎えたことから、キャンドルやオイルランプで光の列を作って祝うようになったのが始まりとされている。

この日を迎えるにあたり、英会話スタッフが、色を塗った米で絵を描いた「ランゴリ」を作成した。通常、各家庭では、祭りなどの祝い事の際に庭先や玄関入口に描かれるそうであるが、学校では、入口エントランスホールに、約3m四方の大きなランゴリを描いた。子どもたちは、カラフルに彩られた絵に大変興味を示し、食い入るように見ては、英会話スタッフに質問をしていたのが印象的であった。

また、Deepavaliイベントの日には、学年の発達に応じてヘナタトゥー体験やものづくり体験等も行い、子どもたちは、日本では決して味わうことのない体験を英語を通して学んでいる。



ランゴリを作っている様子

②Chinese New Year

「Chinese New Year」は、旧暦の正月であり、「春節」としてなじみ深い。この日の英会話では、子どもたちは、アクティビティを通して英語や異文化の新年の遊びに触れた。活動内容を見ると、カップ（神経衰弱）やマール（豆つかみ）等、日本の遊びにもよく似たものがある。名前や使うものは違うが遊びの原点に日本と中国の共通する部分があることを実感できた。

さらに、毎年学校行事でライオンドラゴンダンス鑑賞を行っている。激しいドラの音と迫力あるその演舞に、子どもたちは、歓声を上げてお祝いムードに浸っている。

(2) 国際理解教育部を中心とした取り組み

①民族衣装デー

年間3回、民族衣装デーを設けている。「Hari Raya Puasa」にはマレー衣装を、「Chinese New Year」には中華系の服を着て、朝登校する子どもたちをハイタッチで迎える。「Deepavali」では、シャルワーカーミーズ（南インドの民族衣装：Shalwar kameez）に身を包み、異文化のお祝いに花を添えている。登校する子どもたちも民族衣装を着て登校してもよいので、この日は大変華やかになる。



民族衣装デー（Deepavali）

②先生方の国際理解研修会を生かして

国際理解教育部では、教師自身の見聞を広めること、新たな授業への挑戦と授業改善・教材発掘を目指すことを目的に、年間3回程度の現地研修会を行っている。これまでも、シンガポールの歴史ある街並み（チャイナタウン、リトルインディア）、今もなお姿形を変えずに残っている数多くの動植物（ウビン島、スングレイブロー）、施設の跡地と展示品が物語る第二次世界大戦時代の様子（旧フォード工場記念館、フォート・カニング・パーク）等、部員が中心となって研修場所を斡旋し、学校を離れて現地研修を行ってきた。実際、総合的な学習の時間に、4年生では、校外学習としてリトルインディアやチャイナタウンに出かけたり、5年生では、船でウビン島へ渡り、動植物の観察に出かけたりする等、有効な体験活動につなげることができた。

また、昨年度より、現地交流校と互見授業・事後研修会を行い、指導力の向上と充実を図っている。ICT機器を巧みに操る現地校の子どもたちの姿から、私たちは、さらに広がる授業の可能性を見いだすことができた。一方で、理科の薬品を丁寧に扱い実験を行う日本人の子どもたちの姿に、現地校の先生方は大変驚かれたようで、互いにより刺激を与え合うことができた。話す言葉は違えども、学習に向かう子どもたちの姿や熱意と工夫あふれる教師の指導の様子から、見て学べるところがたくさんあった。

3. シンガポールでの自国理解

(1) 日本人墓地公園清掃

シンガポールには、ここで活躍、生活した日本人の先祖を供養する「日本人墓地」がある。125年前、日本人の骨は、牛や馬同様に捨てられていたという。それを不びんに思った二木多賀次郎氏が、自身が経営していたゴム園の一部を寄付し、日本人のための墓地を作ったのが今もなお大切に守られているのである。

子どもたちは、この経緯や納骨されている人々について、総合的な学習の時間に調べ学習を行い、その活動の一環として清掃活動を行っている。自分たちの先祖が様々な思いでこの地に眠っていることを感じると、清掃をする子どもたちの手にも力が入る。



日本人墓地公園清掃の様子

(2) チャンギミュージアム見学

チャンギミュージアムは、第2次世界大戦中、日本軍占領期に捕虜として収容されていた英連邦軍関係者の遺品などが展示された博物館である。6年生は、歴史の学習の一環として、毎年チャンギミュージアム見学を行っている。日本軍が当時行った戦略や収容者への処罰等、包み隠さず展示された当時の写真や遺品を見て、子どもたちは、様々な感想をもった。シンガポールの地で日本の歴史を学ぶことは、遠く離れた異国での出来事ではない、まさにこの地で起こった身近な出来事として、子どもたちが感じることのできる有効な学習である。

4. 終わりに

海外にいと、その国を知ることは大変重要なことである。一方で、海外に住んでいるからこそ、日本では見えない・感じられない日本というものを学ぶこともできる。「海外にいるからこそ、自国が学べる」そのように感じた派遣期間であった。シンガポールにしながら、日本人としてのアイデンティティーを確立し、母国を知って母国を伝える。そして、それを受け入れてくれるシンガポールを愛する心へとつなげていける活動が、この本校で行っている体験活動にあると感じる。

シンガポールと日本の関係は、当初より友好的な関係であったとは言えないかもしれないが、このように他国を理解し共に協力し合おう行動力と実践力こそ、今後ますます私たちに求められることではないだろうか。シンガポールで育った日本の子どもたちが、この先国際人として活躍するための素地をシンガポールで学べたという誇りと自信をもって、これからも邁進して行ってほしいと願っている。